

山大聖火リレー

山形大学で学んだこと、過ごした日々、
それらはやがてさまざまな成果となって、社会に燦々と火を灯す。
現役山大学生やOBたちが各方面で活躍する姿を追った。



1 釈台の前に座り、右手の平たい張り扇を叩きながら、軍記や武芸もの、人情話などを歯切れよく読む宝井琴柑さん。表情豊かな迫真の高座で観客を引き付ける。



2



3

2 地域寄席、この日の演目は「坂本龍馬とおりょう」。同じ演目をやっても、同じ結果にはならない。会場にいるお客様と一緒に空間をつくるのがライブの魅力。

3 台本と張り扇、扇子。扇子は左手でチョンと叩き、張り扇の合の手になる。根多(ネタ)は、師匠から弟子へ伝えられる。講談の依頼があれば全国どこへでも。

講談という伝統芸能の魅力を広めたい、朗読好きが高じて講談師となった先輩の挑戦。

宝井琴柑 講談師

横浜市出身の講談師・宝井琴柑こと綿貫麦さんが、進学先として山形大学を選んだのは、高校時代に高畠町で農業体験をして山形という土地に憧れたから。在学中もその農家を訪ねては農作業を手伝っていたほどの農業好き。大学卒業後、希望がなくなって農業専門の中堅出版社に就職できて安泰のはずだったが、わずか8カ月で退職し、講談師の世界に飛び込んだ。突拍子もない転身のようなが伏線はあった。小学生の頃から朗読が得意で、それを生かせる習い事として中学・高校時代には現在の師匠の講談教室に通い、東京まで講談を観に行ったりもしていた。当時は職業にしようという意識はまったくなかったのだが、出版社で営業としてセールストークを磨くうちに、他人の作った本を売るためのトークを磨く

よりも、大勢の前で自分自身の芸を売り物にする方がいいと考えるようになった。就職して社会に出て働くことの厳しさを知ったからこそ、俄然、講談師という職業が魅力的に見えてきたし、講談師としての厳しい修行にも耐えられたのだと、一度就職したことを回り道をしたとは捉えていない。そんなアグレッシブな綿貫さんの大学時代の専攻は表象文化論コース。文学、写真や映画、絵画、建築といった幅広い表象文化について学んだ知識が、現在の表現者という立場を支える柱になっていると感じている。そのほかにも、自閉症の子どもたちと交流を持つサークルで活動をしたり、山形国際ドキュメンタリー映画祭のボランティアを務めたり、学外での活動にも積極的に参加した。都心を離れて山形で過ごした

日々、出会った人々を通して物事の根本をきちんと見つめることを学んだという。これらの経験を踏まえて、後輩のみなさんに向けられたメッセージは、“誰にでもできる人生を、あなたがやる必要もないと思う。自分の可能性を知り、もっと迷い、もっと悩んでください”。言葉を商売とする人ならではの印象的な表現でエールを送ってくれた。今年の6月に二つ目に昇進し、いよいよ講談師・宝井琴柑としての本格的なスタートを切った綿貫さん。講談の最大の魅力は、日本語の美しいリズムにあるとして、その伝統を受け継ぎながらも新鮮さをもって表現していきたいと、自分にしかできない人生をしっかりと歩んでいる。

転身の成果